

北海道開発法70年に寄せる由無し言

山中 憲治 (やまなか けんじ)

1949年小樽市生まれ。72年、北海道大学法学部卒。同年、北海道開発庁（現国土交通省）入庁。建設省出向などを経て2005年北海道開発局開発監理部長で退官。（財）北海道河川防災研究センター（現（一財）北海道河川財団）常務理事の後、08年（株）北海道建設業信用保証に入社。20年同社専務取締役を退任。書皮*蒐集家。

飢餓海峡 1965年 内田吐夢

水上勉の原作。岩内大火と洞爺丸台風とを組み合わせて物語の起点にしている。

台風下の岩幌町で強盗殺人放火事件が起きる。町を焼く業火と青函連絡船層雲丸遭難に乗じて逃亡した犯人が渡した金で東京へ出た元娼婦は、彼を恩人と慕い続ける。慈善事業へ大金を寄付したと新聞に載った実業家にあの男の面影を見出した彼女は、恩人に会いに行く…が。

過去に追いつかれた彼は、容疑者として刑事とともに青函連絡船上の人となる。

玄関の引き戸を開けようとした祖父が「あれっ、何かつかかえてる。」と声を挙げた。ガラス戸の向うに木の枝や何やら判らない物が沢山^{もた}凭れ掛っているのが見える。

1954年9月27日の朝、そう、台風15号、洞爺丸台風の翌朝のことだ。



筆者遠影 洞爺丸台風の7日後 澄んだ瞳…だった筈

間もなく5歳になろうとしていた私は、祖父の後ろに控えていて、戸が開いたら直ぐ飛び出して、前の晩に吹き荒れた^{ものすこ}物凄い嵐の爪痕を見ようとしていた。

外に出ると、至る所に木々の枝、それもかなり太いものが飛ばされてきており、屋根のトタン板、道端の随所に設置されていたゴミ箱、他家の生活道具等が折重なる様に転がっていた。

当時、私達一家は小樽に住んでいて、公務員だった父は前の晩に出火し市街地の8割を焼いた岩内大火の応援要員として動員されていた。こういうことになる^{とうとう}と、講談師ばりに語る父だったから、帰宅後延々と説明してくれた筈だが、「岩内に向かう空は真っ赤だった」以外は見事に覚えていない。

青函連絡船洞爺丸は台風の風波により函館湾内七重浜沖で転覆沈没し、乗客乗員1,314名中実に1,055名が死亡するという大惨事となった。

中3の修学旅行の際、洞爺丸型連絡船3等船室（船底の畳敷）の揺れと振動に酔って甲板に居た私は、代替新鋭船津軽丸が反航する姿を見る。洞爺丸型よりも輸送力が格段に強化されていた。

天候に左右される青函航路の安全は期しがたい。そういう声が盛り上がるのは必然だった。

構想自体は戦前からあったものの、将来の課題として地質調査が細々と行われていた難問、青函トンネル構想は一気に具体化に向けて走り出す。

*書皮

ブックカバーのこと。本を買ったときに掛けてくれる紙のカバー。

洞爺丸遭難の翌年2月に技術委員会設置、1963年着工。全長53.9kmのトンネルは1987年完成、1988年から供用開始。北海道と本州とを結ぶ物流ルートが大きく変えることとなる。

女ひとり大地を行く 1953年 亀井文夫

生活苦のため北海道に渡った女性が、子ども二人を抱え、女鉱夫として生きて行く。北炭夕張炭鉱と太平洋炭鉱で長期口ケし、鉱夫の厳しい生活、落盤事故、第二次大戦と中国兵捕虜使役、朝鮮戦争での増産等々、エネルギー基地としての実態が生々しく描かれる。主演は、当時の夫、加藤嘉（中国兵捕虜役）の影響を受けた「人民女優」山田五十鈴。文字通りの汚れ役が珍しい。

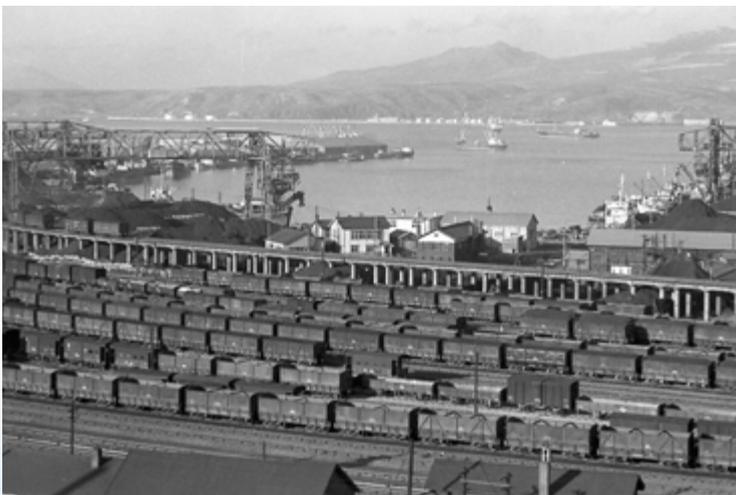
炭労北海道地方本部所属の労働者が一人40円程カンパシ合って作った映画で、最後は、行方不明だった夫も含め家族が炭鉱に再集結。皆で石炭を掘るんだ、明日のために。

室蘭駅の後方、埠頭側には夕張と空知の炭田から来る石炭列車用の陸上高架棧橋があり、石炭列車が引込み線に列をなしていた。1959年には取扱量が500万tを超え、全国の石炭輸送量の17%を占めるに至っている。

高度成長へと向かう日本の産業エネルギーを九州と並んで支える基地、北海道。その中でも室蘭港の石炭取扱量は小樽港の倍ほどもあり、大拠点だった。

同じ年、私はこの街に移り住む。そして、この年から石炭の取扱量は劇的に減少してゆく。エネルギー革命の波が押し寄せていた。

石炭は洗炭場で洗って貨車に積込むから、冬は凍結している。これを埠頭の機械荷役施設に落とし込むため、作業員が貨車を鉄の棒で叩く。「ガンガン叩き」



と呼んで、響き渡る音は冬の風物詩だった。

室蘭は富士製鉄（現日本製鉄）・日本製鋼所を擁する鉄の街でもあり、こちらも鉄は国家なりで意気軒昂。製鉄所の赤い煙が自慢だった時代（正に日本の「炭鉄港」）。

街は活気に満ち、クリスマスや正月には商店街は人で溢れかえった。この大産業都市の一層の飛躍のため、行き止まりの絵鞆半島と対岸とを結ぶ大橋が待望されるようになる。製紙パルプの街だった苫小牧に人工港を作り、重厚長大産業の快進撃が続く日本の新たな工業拠点を勇払原野に築こうという大構想はその前から動き出していた。

後年、私はこの街で勤務し、知り合った明るい娘と結婚する。これは私には無縁の話だが、読者諸氏は、燃える情熱と明日はもっと幸せになれるという若さ故の信念とが導く結果を、決して後知恵で検証してはならない。この点はしっかり押さえておきましょう。

網走番外地 1965年 石井輝男

高倉健の無骨・不愛想な演技が魅力となり、望外のヒットでシリーズ化された。スタンリー・クレイマーの名作「手錠のまゝの脱獄」（1958年）の翻案だと言う勿れ。これに任侠路線が加わって全く別の仕上がりになっている。

刑務所内での主導権争い、脱獄計画と仮釈放の誘惑との板挟み、手錠に繋がれた逃避行。網走刑務所、いや、網走はこれで一気に全国的スターになった。

時代がずっと進んで1972年、私は北海道開発庁に採用され札幌の本局を振り出しに33年間の公務員生活を送ることになる。

2003年、小泉内閣の下で道州制（論者によって形は様々だった）が盛んに議論され、一つの広域自治体が地域ブロックでもある北海道は先陣を務めるのに相応しいと、知事も前向きになり、道州制移行への期待が盛り上がる。地域の自主・自立・自己責任を基本理念とするだけに、地方自治に係わる人々には受け入れ易いものでもあったろう。

曰く、公共事業は国と北海道との代表的な二重行政であり、一本化すべきだ云々…。

しかし、公共事業に限らず、税金、産業振興、厚生

石炭列車で埋まる国鉄埠頭 出展：室蘭歴史写真館（室蘭市ホームページ）

労働、教育文化等々、行政は何事も国から市町村まで重なっている。それらがなぜ分担されているのかという視点が、この発想には全く欠けている。道州制が目指す国全体の形も曖昧だ。

北海道はその恵まれた資源や空間を活用して我が国全体に貢献する地域と位置付けられ、これを国策として推進するため北海道総合開発計画が策定されている。公共事業の予算特例が設けられ、北海道開発予算が独自に一括計上される。北海道局（旧北海道開発庁）－北海道開発局という体制がその推進を担っているのだ。

仮に道州制が導入されても、その統合体である我が国全体にとっての北海道の重要性は揺るがない。二重行政という効率性議論の次元で語るものではないのだ。

北海道局・開発局と北海道庁、市町村は、この大地に行く仲間だ。手錠で繋がれた高倉健と南原宏治のように、進む目的は様々でも、手錠を切断したって離れない。例えが変だあ？

道州制についての解説を2004年春の開発局広報誌に載せた。例によって官僚作文で修飾してはいるが、狙いは一読瞭然。様々な波紋を呼び、私は網走建設業協会に招かれ講演することになる。

「自主自立で行くから他より多くお金を出し続けてねって言われたら、皆さん出しますか？」。

北海道開発法 1950年5月1日公布 内閣総理大臣

「第1条 この法律は、北海道における資源の総合的な開発に関する基本的な事項を規定することを目的とする。」に始まり、北海道開発庁の組織定員を含め全12条から成っていた（現在は全4条）。

他の地域には国土総合開発法（当時）が適用され、

二つの法律は並列だった。

「青函トンネルや石炭生産の話は、総合開発計画とは無関係に昔からある。どれもこの計画が創造したんじゃないくて、有り物を集めただけだろう」という見方がある。

通商産業省北海道工業開発試験所（現国立研究開発法人産業技術総合研究所北海道センター）や北海道東北開発公庫（現日本政策投資銀行）等は、北海道開発庁が設置を推し進めたもので、篠津泥炭地域や根釧原野の農地開発も旧農林省とは別個に構想したもの。

とはいえ、前述のような要素が多いのは事実だ。それは、総合開発計画が関係省庁の施策との調整の産物であるためなのだが、各省庁がその設置目的に則して持つ施策は、国土総合開発のためのものではない。個々の分立した施策を北海道総合開発という計画で編み直し組立ててオーソライズすることは、個別の構想に哲学・思想を、立体性を与えるものでもあるのだ。

「飢餓海峡」の青函輸送路は、「輸送の充実とその強化」(1957年 第1期計画第2次5カ年計画)に始まり、青函トンネル工事が進む第3期計画（1970年）からは北海道新幹線を謳うようになる。「女ひとり大地に行く」の石炭生産は、第4期計画まで生産目標数値を掲げ、第5期計画（1988年）で集約化や代替産業の創出へと舵を切っている。

時代とともに総合開発計画の目標とこれを構成する施策は変わる。しかし、新規採用時に貰った「職員のしおり」の表紙絵は、北海道開発法と北海道総合開発計画の変わることのない立位置を雄弁に物語っている。(完)



「かいはつグラフ」2004年春号 国費を使った反道州制キャンペーンと批判された



「職員のしおり」昭和47年版 我ながら物持ちの良さに感心。捨てられないだけか